

社會に、新しい女といふものが、一段の氣焰を吐いて、女優が衆目を、引きつけて参りました。彼等は、所謂、彼等の自信と、主義と、を宣言してたつて、舊來の道德に逆らひ、習慣を嘲罵して、西洋の空氣を十二分に吸ひ込んで居ると稱へてゐます。新らしいものは、人目につきやすく、人好きのするもので御座いますから、青年の婦女は、いつしか好奇心をもつて、其香をかぎつけ、次第にそまゐりますのに、世の父母たちや、先生達が、徒らに、東洋の儒佛の思想を、虎の巻としてゐては、意識の範圍が、全く別になつて、最も親しい親子師弟の間柄に、意志の疏通が、絶縁されて、お互の同情が、冷え切つて、教育は、只皮相に終つてしまひさうでございませぬ。若し、彼等が、誤つてゐても、導くことが出来ません。フルアルユー以上の失敗が出来ませぬ。良妻賢母養成の女學校を終へて、さる法學士に、嫁いだ淑女がございました。立居振舞は、小笠原式よろしく、晩酌の折には、夫の顔色を侵して、酒の害を説いた。然るに、

彼女の肺肝を絞つた忠言は、終日の勤勞につかれて、一酔の酒に蕩然としようとしてゐる、夫に冷笑と、不快と、陳腐のたはとを以て、迎へられ、且折角の小笠原式作法も、虚偽の權化と印象されて、つひに、破鏡の悲しみを見ました。今一人信仰厚い婦人が、神様に全身をさげ、己を卑くして、他人の意を迎へます如何にも、理想に近い賢婦人で御座いますのに、お話をしてみても、愉快を感じるものは、少う御座いました。もう社會の要求は東洋流に、固着してゐることをもつて、満足しないやうになり、思想が通じてゐれば、おいもの皮さやうならでも、よく了解が、出来ます。微の生えさうな、古い思想にばかりとらはれてゐては、青年を導く資格はございませぬ。危険でも、嫌でも學校の先生は、西洋思想の傾向に通曉して、確たる意見を作るやうに、讀書もしなければならぬ。切に思ひました。筆を措けば、これも、また陳腐なことはと、存じましたが、今日なほ女學校の先生で、西洋史の樞軸になつてゐる

キリスト教を、一滴も味はないで、毛嫌をし盛りに流入してゐるイブセンや、チエホフ等の著作を、見向くものとも思はないお方が、數多いやうに思ひましたから、聊か、皆さんにお訴へ申します。紙面を汚して、失禮いたしました。

秋が來た

文科三年生 ふたば

秋が來た。正宗の焼刃の快い匂ひと、こまやかに立ち上る香の煙のなつかしさをもつて秋が來た。朝々肌に緊張した氣分を與へ、宵々の灯はサラ／＼とかへす頁に美しく輝く。圖書室の前に立つて新刊書の目次を閲するも、古い漢書の樟腦の香をかぐもふさはしい時である。一夜、人少い圖書室の大テーブルに明るい灯を一杯にうけて古典的な物語にのみ耽れば、ひいやりした夜風が、コソソリ來て神秘の扉を叩く、窓から入り來る夜の景色、ニコライの塔は「眠れる城」の様におぼ／＼と霞み、紅梅町に覺めたる町の様に青い灯、赤い灯が花やかに、バット火花をきらめかせては電車がゆく。再び私は現實

から逃げて平安朝のやわらかな空氣に浸るとゆたかな尺八が響いて來る。やがて私はやるせない心細さと悲しみを抱いて底ひもしれぬ黑暗中裏に一人立つて居た。私の睫はいつかうるほつて居た。

息たゆる前の安けさ、それにも似たる夜の静けさよ。尺八の音は絶えた。その名残の振動が大きく私を包んでゐる様な氣がする。そして私の身体全体が靜かにそれに共鳴してゐる様な感がある。やがて大なる沈黙が天地を領して了つた。

星明かな夜、私は一人くづされたる校舎のあとに立つて居た。本郷の空の末は、ほんのりと明るく都の夜は流石に艶めかしい。うつつりとして私は初めて上京した夜の事を考へた。其頃はたゞ希望が達せられたといふ喜びの外何もなかつた。故郷戀しと泣く涙は實に清かつた、甘かつた。自己の不安定な心細さ、矛盾の苦しきなどといふものは我世の外のものとも少くも當時は思つて居た。私共のゆくべき道は希望の光に照され

て開かれてゐるのを知りながら尙老人の様に過去を顧る事が嬉しい、なつかしい。醇化された美化された過去だからである。今、私はもう歴史にくり込まれた舊校舎の影を抱いて泣いてゐる。亂雑に積まれた古い材木、白い土、いさゝかの濕り、みんな古い記憶である。頹された悲しみに慄へてゐる。うす蒼い星の明りが、頼りなく立つてゐる講堂を照しておぼろに。其中には此校舎が建てられた當時またゝいた光が、今この淋しいあさを照すのもあらう。明治の初め泰西の文化をうけて、後の宮の輝く御手に開かれた學校はどんなに美しくあつたらう。知に飢え光明にあこがれた若い人達は、どんなに眞面目に、どんなに目ざましく、自分達の爲に開かれた道へ進んだことであらう。かくて四十年、私達を最後として澤山の若い人を育んだ校舎は、つひに弱りきつた身体を、小さな模型を残して安らかに無に歸して了つた。

しみに打たれてこゝに立つてゐる。武田先生は日々頹される校舎を佐々木病院の二階から身を切られる様な思ひで眺めていらしたときく。そして先生はたまに悲しさに泣きながら運命を共にせられた。私達は永久に永久に頹されたる校舎を忘れないであらう。秋が来て歸校した私達の目にこの頹された光榮がどんなに傷ましく寫つたであらう。秋の都もまた緊張した氣分を與へた。併しその半面に齎す悲しみは否定する事は出来ない。毎日毎夜、新たな頁は幾枚か繰返された。悲しみはまぎらされる事なしに、際だつた鮮やかさを以て迫る。かうして私達は緊張を表とし、悲しみを裏とした袷をきて、秋が来たを意識しながら秋の生活にのつてゆく。

◎そぞろありきて (文四のひこり)

お茶の水橋下の線路のあたりにて一工夫が昔は白なりしとも思はるゝ手袋を片方ぬぎて首をかしげつ、つく／＼と眺め居候。見れば油と塵に汚れ指先の方など眞黒に光りて重げに垂れ下が

り居るにてやがて又元のまゝにはめて仕事にかゝり申候。さぞその用ひ心地あしき事にて候はんをこの手袋一つをも捨てかぬるこの工夫發心すれば雲上の椅子百萬の富をも捨てえたる昔人を如何に羨み居る事と哀に存候。

或る友の語り申候ひき

こみたる電車の運轉手臺に乗り居たる或時にて候。進みゆく先の新見附下のトンネルが高さ三尺足らずに見え候がやがて七十余人を乗せたる電車が走りすぎ候ても煉瓦一つ動さず候ひき(動しては大變に候へ共)手近にあるものは大に遠方にあるものは小に見する間違ひたる人間の眼は時として眼の所有者たる自己を無限に廓大して人間中心説、自己中心思想なども起さしむるとも少からず候。自己の些細なる利害問題より外に考へられぬ人人はこの種の病的なる眼を有する仁と存候。同情に堪へず候。このむき専門の醫も出で候はゞ吾人は誠に幸福に候はむと。

同情する者は弱者に候

田舎道にての事蚯蚓が半分に踏みちぎられて砂

にまみれて怒つて居るを見受け申候。さぞ無念の事と察せられて頻死の彼に一掬の涙を惜みえず候ひき。さばれ思へば踏まるべき地に身を横へて踏まれしを怨むは此方の無理にや候はん。梢の紅籬の菊にこそ行人も眼を止め候はめ。土を食ひて地に住む一小生物は踏まるゝが當然の悲惨なる運命を持ちて生れし者と存せられ候。同行の友七八人この爲に心を附けしは一人も之なく候ひしを他事ならず心動かせし我身は或は彼と同様の星に當れるにやと最後にまた我爲に悲しみ申ひきと薄幸の友は我前に三度涙を拭ひ申候。より確に生き度候

大正二年も暮に近づき申候何處の巷も年を送り年を迎ふる準備戦場の如く劇しく行はれ居候。かゝる世の中に生きようとあせる又生きてると云ふ自覺もなしにふら／＼と廿年を送り來し身がこゝに立ちて初めて明に顧みせられ申候一人住めば社會はそれだけ狭まるべく他の人はそれだけ迷惑を蒙るは當然に候故に此社會に住む人は須くベストを盡して我が社會に與ふるその迷